

徳島県立博物館所蔵 『光格上皇修学院御幸儀仗図絵巻』

—— 付論 『光格天皇新造内裏還幸絵図』解説の追補 ——

所 功

〔解説〕

第一一九代の光格天皇（一七七一～一八四〇）は、今から二百年前（一八一七）に数え四十七歳で讓位された。その関係史資料は、かなり多く伝わっており、ほとんどが宮内庁（京都の東山御文庫と東京の書陵部図書寮文庫）にある。ただ、それ以外に所蔵されているものも少なくない。

一 蜂須賀家原蔵の旧名「観桜御幸行列図巻」

その貴重な絵巻のひとつが、徳島県立博物館に所蔵されている。しかも、全三巻の鮮明なカラー写真を、同館のHPデジタル・ミュージアムにより見ることができ。また、全三巻のモノクロ写真が、同館元学芸員（現四国大学教授）の須藤茂樹氏

により資料紹介されている（「作品紹介「光格上皇修学院御幸儀仗図絵巻」について」『四国大学紀要』第三九号、平成二十三年、WEB掲載）。

そこで、同館に尋ねたところ、貴重な参考資料が何点も送られてきた。よって、それに基づき、要点を以下に解説する。

すなわち、この絵巻は、元来「阿波徳島藩主蜂須賀家」に所蔵されていたが、昭和四十六年（一九七一）、弘文荘の「待買古書目」第三十八号に載り、それを鳴門出身の楠育治氏が購入され、のち他の収集品約三千点と一括して徳島県立博物館に寄贈されたものである。

この段階では、「観桜御幸行列図巻」と名付けられていた。弘文荘の書目によれば、「絹本極彩色。タテ三九・五糎。長さ上巻一一米六六糎、中巻一四米五四糎、下巻七米七三糎」（全

長三四米)の長大な図巻であるが、「題名も筆者も記されていない」ので「仮に右の如く題」したという。

全三巻のうち、上巻には、まず「紋服と上下(袴)に威儀を正した所の立ち人物が、箒を手にして道路を清掃して」おり、ついで画面の上方に「多くの庶民が青筵の上に正座し：美しい衣裳の婦人・子供：五十人ほど、みな端正な姿勢で、行列の盛儀を拜見しようとする人々」が描かれ、さらに「金棒を手にした中年の二人の先ぶれを先頭に、行列が進んで来る」。

行列の人数は、「上巻に二百九十八、中間に四百七十九、下巻に二百五十、合わせて千二十七人」にのほり、「一人ずつが、身長約十一センチほどに大きく描かれ」「荷かつぎ・馬の口とり等の下人の外は、みな紋服の上に上下をつけ、所々に騎馬の公卿、殿上人の姿が交り」、「騎馬の貴人の数は、上巻に五騎、中巻に十騎、下巻に十二騎描かれ」る。しかも「中巻の半ばすぎに、十五人の仕丁にかか(昇)れた玉輦が進み：後方に：関白らしい人物が従い：その後七人か(昇)きの女輿が続く」とある。

二 徳島県立博物館所蔵本の河野太郎氏による考証

大筋わかりやすい説明であるが、筆者は、「画風から推して、多分に江戸の画人」というに留まる。それに対して、徳島県立博物館へ寄贈された後、県の文化財指定に先立ち、県立文化財

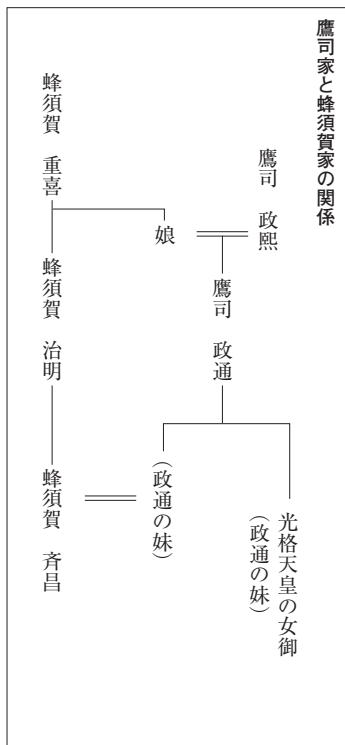
専門委員の河野太郎氏(徳島大学教授)が独自に調査された報告書「光格天皇修学院御幸儀仗図三巻について」(手書き、約三八字×一五行×五枚)で、より詳しく考察されている。

河野氏の報告によれば、「この作品は：正式には(右)表題のように称すべきもの」であり、「作者は阿波藩の絵師渡辺広輝(一七七八〜一八三八)で：彼の門弟守住貫魚(一八〇九〜一八九二)を助手として補写を命じ完成したものである。しかも「貫魚が広輝より輝の字を授けられたのは文政十二年正月十一日であるから、この作品は文政七年十月着手、文政十二年の初めに完成したものと考えられる」という。

その内容については、まず上巻に描かれているのが「先導した京都所司代内藤紀伊守信親の一行と、仙洞附成瀬因幡守正育の一行である」ことを、「内藤の家紋」と「成瀬の家紋」から確認されている。

また中巻の中心は「上皇の玉輦」であり、「香川大学図書館神原文庫『文政七甲申(年)九月廿一日 修学院御幸御当座和歌』という写本：によれば、三十八人の公卿がお供したことがわかる」「最高の供奉は鷹司政通であるが、上皇の御子有栖川宮韶仁親王も中務卿としてお供して」おり、他の公卿も「家紋によって推定できるものが多い」という。

さらに下巻では、「仙洞附の小笠原豊前守直信の一行」であることが「小笠原の家紋」により確認できる。その後に描かれ



る「お供の公卿たち」については、別紙の「御当座和歌」によって知ることができる」として、一々書かれていない。

最後に、「蜂須賀家がこの図を描かせた理由」として、「時の藩主齊昌の夫人は関白（鷹司）政通の妹、政通の母は蜂須賀重喜の娘、即ち齊昌の叔母にあたる、というような近い親戚であること、時の（光格）天皇の女御は、政通の妹であると同時に（に）蜂須賀齊昌夫人の妹にあたり、皇室とも深い関係にあること」から、「記念のために残したものである」と見られている。

その上、絵巻の作者が徳島藩絵師の渡辺広輝と直弟子の守住貫魚であること（成立は文政十二年以前）、また上巻・中巻に描かれるのが、京都所司代と仙洞付の一行であることも、家紋により判明する。さらに当時の関白鷹司家と藩主蜂須賀家との

深い姻戚関係から、当藩で作成された理由も推測される。

ただ、この報告書では、修学院への御幸に関する文政七年十月当時の記録が全く取り上げられていない。よって本稿では、記録と絵巻を照合して、絵巻に描かれた主要な参列者を特定する。あわせて、この時の「当座和歌」史料を翻刻し、絵巻との関連にも言及する。

三 文政七年の修学院御幸に関する資料

まず当時の御幸記録は、かなり現存する。宮内庁書陵部だけでも、左の十数点がある。（現在、光格天皇・上皇の関係資料として一括調査し、複写を収集している。）

- 1 光格上皇修学院御幸一会（二一〇―四八八）
- 2 光格上皇修学院御幸御列書（二〇八―六四五、二一〇―四五四）
- 3 光格上皇修学院御幸列（二〇八―六四七）
- 4 光格上皇修学院御幸雜例（三五〇―四三九）
- 5 光格上皇修学院御幸次第（F一〇―三九七）
- 6 光格上皇修学院御幸書類（葉三九四）
- 7 光格上皇修学院御幸儀（二〇八―六三四）
- 8 光格上皇修学院御幸始御列書（二〇八―九一五）
- 9 光格上皇修学院御幸始列書並供奉装束記（二六七―35）
- 10 光格上皇修学院御幸行列（二〇八―六五二）

- 11 光格上皇修学院御幸供奉式目(二〇八六五〇、二〇八一九一一)
- 12 光格上皇修学院御幸奉行日記(西 二六四)
- 13 光格上皇修学院初度御幸行粧記(一七五十三八五)
- 14 光格上皇修学院御幸御輿図(四五十二五)
- 15 光格上皇修学院御幸服色(二〇八九一三)
- ※須藤茂樹氏は前掲論文で、国文学研究資料館所蔵の「蜂須賀家文書」目録によって、「仙洞御所修学院御幸行列書」(書陵部の1に相当)・「修学院御幸供奉色目写」(同11に相当)・「修学院御幸次第」(同5に相当)各一冊と「修学院御幸御会」二冊・「鷹司閔白様御院恭御列書」三冊をあげておられる。ただ「文政六年」と記されているが、いずれも六年は「七年」と思われる。
- しかも宮内省編『光格天皇実録』(ゆまに書房刊本第四冊)文政七年(一八二四)九月二十一日条には、(イ)『洞中執次詰所日記』、(ロ)『日次案』、(ハ)『実久卿記』、(ニ)『修学院御幸録』(東山御文庫所蔵本)、(ホ)『修学院御用』(同上)が引載されている。
- このうち、行列については(ロ)と(ハ)が詳しい。特に(ハ)は当日「殿上人」として参列した橋本実久(三十五歳)の日記であり、衣服も一々注記されている。よって、その原漢文を書き下し文で左に示そう(本文を〔a〕〔i〕に区切

り、〔c〕の行列には①(35)の一連番号を付し、各々の列中人物に数字で傍注を加え、記事の重要な部分を太字にした)。

四 殿上人橋本実久の御幸供奉記録

〔a〕文政七年九月二十一日 庚戌、晴、風静かなり。今日(光格)上皇、修学院の離宮に御幸したまふなり。(蔵人)頭右大弁頭孝朝臣奉行す。予(橋本実久)供奉を為すべきに依り、寅剋、移菊の狩衣(細注・傍注省略)・蘇芳の練絹〔文藤・立涌〕、黄の練単・薄色の奴袴〔上結・白の下袴を着け具す。乗馬〔鹿毛・水干鞆・蒔絵橋・同鑑・錦皮表敷・同力革豹皮切付・同肌付・熊皮泥障・帽額鏡輿・紺絨布手綱・同腹帯・緋總鞆〕、舎人一人〔細烏帽、花田水干〕、隨身四人〔一座蘇芳上下黄単〕、小舎人童一人〔二藍水干・上下白単〕、雑色二人〔細烏帽・朽葉上下紅単〕、白張二人、笠持〔白張〕等召具、参院、供奉の人々参集。

〔b〕卯剋、出御の御催あり。公卿左大臣以下、(紫宸殿)南庭に列立す〔北上東面、或いは半靴、或いは浅沓〕、予は蒔絵の野剣〔紫の革緒〕を帯し、半靴を着け、中門の外に立つ〔東上北面〕。：

次に上皇〔御烏帽子・直衣〔白〕白御衣・同御単・白の御奴袴〕、御輿に乗りたまふ。閔白〔鷹司政通〕御簾に候せしめ給ふ。右中将隆起朝臣、御剣を給はる。乗御の後、左将曹藤

原武備に賜りて持たしむ。殿上人以上以前行し、西の大門の外で馬に騎る。…予も馬に乗りて前行す。皇太后宮大夫の後騎は御後に候す。関白は行列より後に供奉し給ふ〔乗馬〕。

〔c〕 其の御列／先づ殿上人〔下臈を先にす。二行〔列〕〕。

①〔院司〕蔵人1右将監大江俊矩〔練薄物、菊の雁衣〔文（紋）千鳥〕・薄色の衣・紅の単・鳥多須喜・奴袴・野剣を帯び尻鞆を差す、半靴〕、2乗馬〔鹿毛・水干鞍〕、3舎人一人〔細烏帽子・蘇芳の水干・白の単・葛袴〕、4小舎人童一人〔黄の上下・雁衣・紅の単〕、5雑色四人〔細烏帽子、二人は二藍の上下、黄の単、二人は海松の上下、赤の単〕、6下品の雑色二人〔花田の上下、細烏帽〕、7笠〔白張〕。

②〔院司〕蔵人1民部大丞大江俊常〔練薄物、菊の雁衣〔文〕・黄菊の衣・紅の単・鳥多須貴・奴袴、野剣を帯び尻鞆を差す、半靴〕、2乗馬〔青、水干、鞍〕、3舎人一人〔細烏帽・二藍の水干・黄の単・葛袴〕、4小舎人童一人〔蘇芳の水干・上下黄の単〕、5雑色四人〔細烏帽、二人は麴塵の上下・赤の単、二人は蘇芳の上下・黄の単〕、6下品の雑色二人〔海松色の上下・細烏帽子〕、笠〔白張〕。

③〔院司〕左兵衛佐1恭光〔織襖・雁衣・地白、文〔紋〕紫・蘇芳の衣・黄の単・半色の奴袴、野剣を帯び虎皮の尻鞆を差す、半靴〕、2乗馬〔鹿毛・水干・鞍〕、3隨身二人〔細烏帽子・二藍の上下・紅の単・黒漆の剣〕、4小舎人童一人〔紅

結染の水干・上下・黄の単〕、5雑色四人〔細烏帽子・白の上下・紅の単・花田帯〕、6下品の雑色〔白張〕、笠〔白張〕、7舎人一人〔朽葉の水干・白帷・葛袴〕

④〔院司〕蔵人1権右少弁光暉〔織襖・雁衣・地青、文は紫・梅丸紅引倍義・白の生の単・鳥多須喜・奴袴・半靴〕、2乗馬〔青・水干・鞍〕、3舎人一人〔細烏帽子・二藍の水干・黄の単・差鞭〕、4雑色六人〔細烏帽、三人は花田の上下・黄の単、三人は白の上下・紅の単〕、下品の雑色二人〔白張〕、5笠〔白張〕

⑤〔院司〕蔵人1右中弁隆光〔白の練薄物の単・雁衣〔無文〕・一斤染の衣・白の単・茶染の布・奴袴・半靴〕、2乗馬〔青・水干・鞍・浅黄の總鞆〕、3隨身二人〔折烏帽・榎の上下・濃き単・黒漆の剣・同壺胡六・同弓〕、4小舎人童一人〔白の平絹の上下・花田の単・熊皮毛の沓〕、5舎人一人〔細烏帽・青丹の水干・上下黄の単・差鞭〕、6雑色二人〔細烏帽・白張の上下・白の単・青朽兼の帯〕、7看督長二人〔平礼・白張の上下・白の単・黒漆の剣・同壺胡六・同弓・市比の脛巾〕、8火長二人〔尋常の如し〕、9下品の雑色二人〔白張〕、10笠〔白張〕。

⑥〔院司〕左中将1為全朝臣〔白の襖・雁衣〔文は烏丸〕・黄菊の衣・紅の単・紫の奴袴、野剣を帯ぶ、半靴〕、2乗馬〔青・水干・鞍〕、3舎人一人〔細烏帽子・花田の上下・白の

単)、4 隨身四人〔細烏帽子・麴塵の上下・紅の単・黒漆の剣を帯ぶ〕、5 小舎人童一人〔二藍の上下・紅の単〕、6 雑色二人〔細烏帽子・朽葉の上下・青の単〕、7 下品の雑色二人〔白張〕、8 笠〔白張〕。

⑦ 右少将1 保右朝臣〔菊の雁衣・練の薄物、文は藤立涌、薄色衣・紅の単・紫の奴袴・野剣を帯し、獨皮の尻鞆を差す、半靴〕、12 乗馬〔鹿毛・水干・鞍〕、3 舎人一人〔細烏帽子・蘇芳の水干・黄の単・白葛の袴〕、4 隨身二人〔折烏帽子・花田の上下・紅の単・黒漆の剣〕、5 小舎人童一人〔薄蘇芳の上下・水干・黄の単〕、6 雑色四人〔細烏帽子・二藍の上下・紅の単〕、7 下品の雑色二人〔白張〕、8 笠〔白張〕

⑧ 左中将1 有言朝臣〔紫の細烏帽子・懸緒・白襖の練薄物・雁衣、文は龍膽、立涌龍膽の衣・紅の単・紫の奴袴・野剣を帯ぶ・半靴〕、2 乗馬〔青・水干・鞍〕、3 舎人一人〔細烏帽子・花田の上下・水干・差鞭〕、4 隨身四人〔細烏帽子・朽葉の上下・黄の単・帯剣〕、5 小舎人童一人〔薄蘇芳の上下・水干・青の単〕、6 雑色二人〔細烏帽子・二藍の上下・紅の単〕、7 白張二人、8 笠〔白張〕

⑨ 予〔橋本実久〕〔衣体、以下先(a)に注す〕

⑩ 〔院司〕 右中将1 隆起朝臣〔移り菊の練薄物・雁衣、文は紅葉・杉葉の衣、紅の単。二藍生奴袴・野剣を帯ぶ、半靴〕 2 乗馬〔青・水干・鞍〕、3 舎人一人〔細烏帽子・香上下・水

干・紅の単・白葛の袴〕、4 隨身四人〔細烏帽子・二藍の上下・紅の単・黒漆の剣・文緒あり〕、5 雑色二人〔細烏帽子・蘇芳の上下・黄の単〕、6 小舎人童一人〔薄蘇芳の水干・青の単〕、7 下品の雑色三人〔白張〕、8 笠〔白張〕

⑪ 〔院司奉行〕 頭右大弁1 頭孝朝臣〔位次は為全朝臣の下と雖も、貫首たるの間、位次を乱し、上臈と為す。花田の練薄物・雁衣、裏同じ・薄色の衣・白生単・薄色藤丸花鳥丸奴袴・半靴〕、2 副舎人一人〔細烏帽子・香上下・白葛の袴・黄の単・白布の帯〕、3 瀧口源敦義〔折烏帽子・白襖の水干・上下紅綾の単・黒漆の剣・重藤の弓・狩胡六〕、4 雑色四人〔細烏帽子・白の上下・黄の単〕、5 白張三人、6 笠〔白張〕 公卿

⑫ 左大弁宰相光成朝臣〔織襖・雁衣、地白・文は紫花菱・黄衣・朽葉藤丸織物奴袴・半靴〕、2 乗馬〔栗毛・水干・鞍〕、3 舎人二人〔麴塵の水干上下〕、3 侍中原景恕〔折烏帽子・白寄布の単・雁衣・紅の単・白襖袴・黒漆剣〕、4 内府〔厩〕、5 舎人一人〔細烏帽子・花田上下・黄の単〕、同居飼〔細烏帽子・退紅黒袴〕、6 雑色四人〔細烏帽子・白張の上下・花田の単〕、7 下品の雑色四人〔白張〕、8 笠〔白張〕

⑬ 左兵衛督1 〔永雅卿〕〔織襖の単・雁衣、地黄・文紫花鳥丸紅衣・白生の単・薄色藤丸織物奴袴、野剣を帯ぶ、半靴〕、2 乗馬〔青・水干・鞍・虎皮の泥障を差す〕、3 舎人二人〔細

- 烏帽・一人は青唐紙上下、水干〈文色蘇芳花鳥〉・白の大帷、一人は花田唐紙水干〈文色黄龍膽立涌〉、白葛袴、4 隨身四人〔細烏帽・二藍の上下単・黒漆剣〕、5 雑色三人〔細烏帽子・朽葉上下、紅の単〕、6 下品の雑色三人〔白張〕、7 笠〔白張〕
- ⑭左衛門督1〔雅光卿〕〔薄色・烏帽子・懸緒あり、蒲萄練薄物雁衣〈文は花菱唐草丸〉、黄菊の衣、紅の単、薄色藤丸織物奴袴、野剣を帯ぶ、半靴〕、2 乘馬〔鹿毛・水干鞍〕、3 舎人二人〔細烏帽子・花田の水干上下帷〕、4 隨身舎人〔細烏帽子・二藍上下紅単・黒漆剣〕、5 雑色四人〔細烏帽子・蘇芳上下黄単〕、6 白張四人、7 笠〔白張〕
- ⑮〔院司〕新大納言〔1 俊明卿〕〔紫組、烏帽子、懸緒あり、虫襖白裏雁衣〈文は飛雲〉、薄色の衣、白の単、浅黄藤丸織物奴袴、半靴〕、2 乘馬〔鹿毛、水干鞍〕、3 舎人二人〔細烏帽、一人は薄色上下黄単、一人は褐返水干・白葛袴・黄単〕、4 雑色八人〔細烏帽・麴塵上下黄単〕、5 白張四人、6 笠〔白張〕。
- ⑯萬里小路大納言1〔建房卿〕〔薄青白裏雁衣、文は根笹、薄色衣・白単・浅黄藤丸織物奴袴、半靴〕、2 乘馬〔青・水干靴〕、3 舎人二人〔一人は二藍上下水干・白単・一人は麴塵の水干・白単・白葛袴〕、4 雑色八人〔細烏帽、花田の上下黄単〕、5 下品の雑色四人〔白張〕、6 笠〔白張〕
- ⑰〔院司〕源大納言1〔重能卿〕、〔黄菊練薄物、雁衣〈文は龍膽〉、薄青衣・紅単・薄色藤丸綾奴袴・半靴〕、2 乘馬〔青・水干鞍〕、3 舎人二人〔細烏帽・二藍・上下黄単〕、4 雑色六人〔細烏帽・朽葉上下紅単〕、5 白張四人、6 笠〔白張〕
- ⑱甘露寺前大納言1〔国長卿〕〔紫組、烏帽子、懸緒あり、満菊白裏雁衣〈文菱形唐草中花菱〉、黄衣、白単、浅黄藤丸織物奴袴、半靴〕、2 乘馬〔青、水干鞍、虎皮泥障〕、3 舎人二人〔細烏帽、褐返上下水干、白布帯、白単〕、4 侍二人〔加茂重敬〈折烏帽子、薄青布衣、二藍帯、白袴、白生単、黒漆剣〉、藤原光清〈薄色布衣、白余同上〉〕、5 雑色六人〔細烏帽、縹上下、白布帯、紅単〕、6 走雑色二人〔白張〕、7 笠〔白張、鹿皮鞍覆を付す〕
- ⑲1 執權大納言〔家厚卿〕〔菊の雁衣〔文杏葉立涌〕、薄色の衣、白単、薄色藤丸織物奴袴、半靴〕、2 乘馬〔鹿毛、坐鞍、尺泥障〕、3 舎人二人〔細烏帽、赤結染水干、白帷、白葛袴〕、4 諸大夫礼和〔折烏帽子、紺青丹雁衣、白単、浅黄奴袴〕、5 侍藤原綱備〔折烏帽子、縹白裏布衣、黄単、白襖袴〕、6 衛府長藤原〔細烏帽子、褐返上下紅単、黒漆剣〕、7 雑色六人〔細烏帽、白上下紅単〕、8 白張二人、9 笠〔白張、虎皮鞍覆を付す〕
- ⑳1 執事左大臣〔斉信卿〕〔烏帽子〈紫組懸緒〉、直衣、黄菊衣、白単、薄色藤丸織物、奴袴〕、2 乘馬〔鹿毛、大和鞍、

尺泥障)、3 舍人二人〔細烏帽、一人は薄色上下水干、白布帯、白単、蘇芳上下水干、白布帯、黄単〕、4 長一人〔平礼、朽葉上下白布帯、白単、差鞭〕、5 居飼〔退紅、黒袴〕、6 諸大夫光華朝臣〔折烏帽、白雁衣、文花鳥丸、薄色衣、白生単、青鈍奴袴〕、7 俊隼〔折烏帽、虫襖雁衣〔文〇〇丸〕、紅衣白生単、花田の奴袴〕、8 広秋〔折烏帽、小桑雁衣〔文花鳥菱〕、薄色衣、白生単、花田の奴袴〕、9 侍源時富〔折烏帽、海松色布衣〔裏白生〕、白生単、白襖袴、黒漆剣〕、10 越智通賢〔折烏帽、二藍布衣〔同裏白〕、白生単、白襖袴、黒漆剣〕、番長、左は11 藤原房幾〔細烏帽、二藍上下、白布帯、紅打衣、紅単、黒漆剣、雁胡六、藤弓弦卷〕、右は12 源定保〔衣、同上〕、13 近衛六人〔左右各三人、細烏帽、麴塵の上下紅単、白布帯、黄単〕、14 雑色六人〔細烏帽子、花田上下、白生帯、黄単〕、15 走雑色四人〔白張〕、16 笠〔白張〕

②① 上臈御隨身、番長、左は1 藤原真品〔折烏帽、朽葉布衣、上下紅単、狩胡六、野矢黒漆剣〕、右は2 秦常敬〔折烏帽子、蘇芳布衣、上下紅単、狩胡六、野矢・弓・黒漆剣〕、府生、左は3 秦常孝〔折烏帽、二藍布衣、上下紅単、狩胡六、黒漆剣〕、右は4 源為祥〔折烏帽子、花田の布衣、上下紅単、狩胡六、黒漆剣〕、將曹、左は5 源武備〔御剣を持ち、御輿の左に在り。折烏帽子、麴塵布衣、上下紅単、狩胡六、黒漆剣〕、右は源供永〔折烏帽、白布衣、上下紅単、狩胡六、黒

漆剣)

②② 御輿〔賀輿丁四十人、長二人、各退紅、白袴〕

②③ 庁官繁直朝臣、御香を持ち、柳筥に居る〔平礼、白張上下、紅単〕、御雨皮、退紅仕丁これを持つ。御笠〔白張これを持つ〕

②④ 下臈御隨身、左は1 源清郁・2 紀淑亮・3 大江芳全。右は4

源武理・5 源尚文・6 紀宗□〔各々折烏帽子、蘇芳布衣、上下紅単、黒漆剣、弦巻を付す〕

②⑤ 後騎、皇太后宮大夫1〔実堅卿〕〔香スキ白雁衣、文紅葉襷、

花田引陪義、黄単、薄色藤丸織物奴袴、半靴〕、2 乘馬〔月毛、御馬を申請す、水干鞍〕、3 舍人二人〔細烏帽一人、赤色水干、上下黄衣、一人は二藍水干、白葛袴〕、4 御厩舍人〔平礼、櫛上下、薄色衣、赤帷〕、5 居飼〔退紅、黒衣袴〕、

6 諸大夫康民〔烏帽子、縹雁衣、文龍膽黄衣、紅単、青鈍奴袴〕、7 侍藤原忠芳〔烏帽、掠蘭地布衣、裏黄紅単、白襖袴、黒漆剣〕、8 小雑色六人〔細烏帽、一人は朽葉上下紅単、一人は縹上下黄単、一人は縹上下白単、一人は薄虫襖上下黄単、一人は朽葉上下白単〕、9 笠〔白張〕

②⑥ 召次、1 藤原叙純〔各々折烏帽、花田上下紅単〕、2 同久定〔二藍上下紅単、黒漆剣〕、3 源紹喜〔白張上下紅単、黒漆剣〕、4 加茂志顕〔白張上下紅単、黒漆剣〕、5 源紹義〔白張、上下紅単、黒漆剣〕、6 藤原叙久〔二藍上下紅単、黒漆

劍)

⑳御後官人、1 右大尉是保〔平礼、白襖上下一斤染衣、黄単、野劍、狩胡六、重藤弓〕／2 看督長二人〔平礼、白張上下白単、黒漆劍、壺胡六、弓藁本脛中〕、3 調度懸〔平礼、青丹上下〕、4 雑色二人〔細烏帽、蘇芳布衣、黒袴〕、5 火長〔常の如し〕、6 白張二人

㉑上北面、1 日向守親重〔折烏帽子、海松雁衣、薄色衣紅単、浅黄奴袴〕、2 兵部権小輔良武〔折烏帽子、黄雁衣、白衣、紅単、浅黄奴袴〕、3 加賀守友直〔折烏帽子、花田雁衣、薄色衣、紅単、浅黄奴袴〕、4 能登守重礼〔折烏帽子、白雁衣、薄色衣、紅単、浅黄奴袴〕、5 各々雑色二人、6 白張二人これを具す。

㉒下北面、1 親之〔御杓（つと）を持ち御輿（こし）の右に在り、各折烏帽、海松色布衣、白衣黄単、縹奴袴、各々帯劍、狩胡六〕、2 保行〔白張布衣、薄色衣、紅単、浅黄奴袴〕、3 氏祥〔薄色布衣、黄衣、紅単、縹奴袴〕、4 景文〔白襖布衣、紅衣、黄衣、縹奴袴〕、5 光邑〔二藍衣、布衣、黄衣、紅単、縹奴袴〕、6 重名〔麴塵布、紅単、白襖袴〕、7 藤原憲澄〔松重布衣、黄青裏衣、濃単、摺箔白襖袴〕、各々8 郎党・9 雑色・10 白張等これを具す。

※『日次案』では、6と7の間に「弘隆／藤原往益／賀茂共清／藤原裕益／藤原徳盛」の五名あり。

㉓藏人所衆 1 信守〔折烏帽、麴塵平礼、二藍上下紅単〕、2 明遠〔折烏帽、海松色上下、紅単〕

㉔御衣辛櫃〔一合〕、庁官紀徳直〔平礼、白張上下紅単〕、群行裏、蘇芳衣、白単、薄色雲立涌奴袴、白下袴〕、2 乘馬〔鹿毛、大和鞍、緋総鞆〕、3 舍人二人〔細烏帽、赤色上下黄単〕、4 長一人〔平礼、二藍狩衣、白襖袴、朽葉衣、紅単〕、5 居飼〔細烏帽子、退紅黒袴〕、6 諸大夫俊彦朝臣〔折烏帽子、狩衣、蘇芳衣、白単、花田奴袴〕、7 顯遂〔折烏帽子、蒲萄狩衣、薄色衣、紅単、花田袴〕、8 義冬〔烏帽子、白狩衣、紅衣、同単、花田奴袴〕、9 侍穂積重任〔折烏帽子、香布雁衣、白単、黒漆劍、白襖袴〕、10 藤原則忠〔折烏帽子、篠青布雁衣、紅単、黒漆劍、白襖袴〕

府生、左は11身人部清生〔細烏帽子、花田上下萌木衣、黄単〕、右は12秦謹信〔細烏帽子、篠青上下、紅引へキ紅単〕、番長、左は13秦常吉〔細烏帽子、苦色上下、朽葉衣白単〕、右は14身人部清広〔細烏帽子、麴塵上下紅引へキ紅単、已上各々狩胡六、黒漆劍、尻鞆を入れる〕、15 近衛六人〔一座は黄香上下紅単、二座は褐色上下黄単、三座は花田上下紅単、四座は木賊上下紅単、五座は朽葉上下紅単、六座は醬色上下黄単、各々細烏帽子、黒漆劍、尻鞆を入れる〕、16 官人左衛門少尉源隆貞〔平礼、白張上下一斤染衣、黄単、狩胡六、黒漆劍

を具し尻鞘を入れる、17番督長・18火長・19放免・20雑色等)

③③車代 空車也〔雨皮持つ退紅車副祿人、細烏帽子、白張上下〕、番頭雑色六人〔細烏帽子、青上下黄単〕、下品雑色四人〔細烏帽子、花田上下〕、群行。

③④侍従1信敦朝臣〔所司代なり。越後村上城主内藤紀伊守、折烏帽子、香黄裏雁衣、薄色衣、紅単、薄色奴袴、野剣を帯ぶ〕、2乗馬〔総鞆、青〕。此の外、前後に武士供奉数輩

〔d〕已終剋、下離宮に到らしめ給ふ。西門外に於て各々下馬し入門す。殿上人以上前行列立、御輿、前に寄す。〔公卿南上東面、殿上人西上南面〕。次に御輿を寄す。関白、御簾に候せしめ給ふ。隆起朝臣、御剣を持ちて参上す。次に下御したまふ。次に御輿を撤す。左大臣以下、各々列を離れ、内々方に参上〔関白以下、各々衣単を脱ぐ〕。

〔e〕未剋斗、上離宮に出御、御歩行なり。関白以下、各々供奉す。予、御前に候す。先づ隣雲亭に御し、次いで窮水〔窮遼軒〕に御したまふ。此の所に於て今日の御会の御製拝見す。次に当座の御会に在り。御題、水樹多佳趣〔御題なり〕。一両日中に詠出て献呈すべきの旨仰せなり。奉行民部卿、次に隣雲に還御したまふ。

〔f〕戌剋斗、又窮水に御したまふ。管絃あり御所作あり。御目録、盤渉竹林楽〔御笛〕、青海波〔御笙〕、千秋楽〔御琵琶〕、平調合歡塩、御笙小良子〔御箏〕。所作人、1関白

〔笙〕、2大宮大夫〔笙〕、3日野前大納言〔笛〕、4池尻前大納言〔笛〕、5綾小路三位〔箏藁〕、6東久世三位〔箏藁〕、7隆起朝臣〔笙〕、8有言朝臣〔笛〕、9隆光〔笛〕、10大江俊矩〔笛〕、11予は便所に候す。事了りて下離宮に還御したまふ。御歩行なり。予、御前に候して脂燭す。今日、事毎に仰せ有り。祝着に了んぬ。

※『日次案』は「和歌御会」の「詠進の人々」を、ほかに十数名あげる。

〔g〕子終剋、還御の御催有り。関白以下、各々衣単を着けて列立し、御輿の前に寄す。其の儀、一に初めの如し。御輿を寄せ乗御したまふ。殿上人以上前行す。予、西門の外に於て乗馬〔隨身二人、松明を取り馬の前に在り〕。其の御列、初めの如し。

〔h〕寅初剋、本殿〔仙洞御所〕に還御したまふ。其の儀、初めの如し。西大門より隆起朝臣以下、松明を取りて前行し、中門の外に留まる。御輿、南階に寄す。御隨身、前声を発す。隆起朝臣、藤原武備より御剣を取りて参上す。関白、御簾に候し給ふ。次に下御し、御簾の中に入りたまふ。

是の後、常御所に参り慶賀申し上ぐ。事了りて退出〔乗馬〕。〔i〕今日、天晴、風静か、一事も異儀無し。誠に大慶これに過ぎず。

③⑤今日内々参向の人々、1一位〔広橋胤定〕〔武家伝奏〕、2日

野前大納言（資愛）〔院伝奏〕、3 冷泉前大納言（為訓）〔同上〕、4 民部卿（上冷泉為則）〔御会奉行〕、5 池尻前大納言（暉房）〔林丘寺宝御世話人なり〕、6 鷲尾前大納言（隆純）〔内々禁中より御供〕、7 右兵衛督（藤原為修）〔修理職奉行〕、8 刑部卿（安倍泰行）〔御献奉行〕、9 綾小路三位〔御楽御用〕、10 大原三位〔御献奉行〕、11 東久世三位（通岑）〔御楽御用なり〕等なり。

五 『光格上皇修学院行幸儀仗図絵巻』との対比

以上が橋本実久の修学院行幸供奉に関する記録である。実久は寛政二年（一七九〇）、橋本実誠と花山院常雅娘との間に生まれた。この文政七年（一八二四）御幸当時（三十四歳）、正四位下近衛権中将で、長らく「院番衆」を務めていた。その日記は、文化十年（一八一三）から安政四年（一八五七）に薨ずる直前まで四十四年分の自筆本が、宮内庁書陵部に現存している（五〇八―五五）。

その記事は、当日の出来事を詳細かつ正確に記録しようとする。とりわけ五月二十一日条では、御幸の行列に参加したほぼ全員の衣服と乗馬の種類や形状などを、いちいち注記しており、行列の実態を窺う有力な手懸りとなる。

しかも、当日の一大行列を丁寧に描いた絵巻が複数ある。そのひとつが、現在徳島県立博物館に所蔵される『行幸儀仗図絵

巻』（全三巻）にほかならない。

そこで、実久の記録とこの絵巻の各場面を一々対比してみると、およそ次のような事実を確認することができる（記録の主役な人物に引用文の番号を冠する）。

上巻の冒頭上には、河野氏も指摘されるごとく、左の松ヶ崎山と右の横山の間奥に比叡山が描かれ、下半には紋付の袴を着た男三人が箒を手に掃除している。

次の上半には、青筵の棧敷に着飾って正座しながら行列を見物する老若男女の町人約四十名（うち婦人九名、子供三名、僧侶二名）が活々と描かれている。

その次に、紋付袴姿の侍八名および物持など奴十名と侍十二名の各二列（以下同）、栗毛の馬に乗る白い狩衣姿の人（所司代内藤信敦か）と、その後を護衛する袴姿の侍十名と口取・物持の奴十五名、それに袴姿の侍六十六名と物持の奴八名などが続く。

ついで、黒毛の馬に乗る褐色の狩衣姿の人（仙洞付成瀬正育か）と、それを護衛する袴姿の侍十四名と白装束の物持四名、左右を護衛する十六名と物持八名、それに板輿と担い手四名、周囲の従者十二名（うち一人僧形）と物持一名、および黒毛の替馬と白装束の口取・物持六名が続く。

次に、栗毛の馬に乗る深緑の狩衣姿の人と、左右の従者四名と物持五名、および同様の栗毛の馬に乗る深緑の狩衣姿の人と

左右の従者四名と物持七名、それに袴姿の侍十名と物持三十六名、および従者十名と物持十名が続く。

以上の上巻は、中巻の前衛として侍が大部分を占めているが、橋本実久ら公家の記録には何も書かれていない。

それに対して中巻は、光格上皇の御輿を中心に、供奉した公家と従者を克明に描いている。それが記録と符合するかどうかを以下に検討する。

中巻は、冒頭から九名の騎馬を続けた後に、上皇の御輿を描き、さらに騎馬一名と朱色の辛櫃と騎馬一名および車代の女輿を描く。つまり、記録にみえる騎馬は二十名を越すが、絵巻には主要な人物十一名しか描かれていない。

そこで、記録〔c〕と照らし合わせてみると、騎馬の「殿上人」①～⑪（ほとんど「院司」は省かれる一方、「公卿」⑫～⑳（九名）および㉔㉕は描かれている（中巻の末尾は、絵の続き方が不自然にみえるので、欠失があるかもしれない）。

すなわち、冒頭は記録⑫の左大弁参議広橋光成（28）とみられ、織襖（地黄）の雁衣（狩衣）で、栗毛の馬に乗る。次は⑬の左兵衛督（参議）の高倉永雅（41）とみられ、織襖（地黄）の雁衣で、青毛の馬に乗る。次は⑭の右衛門督（中納言）飛鳥井雅光（43）とみられ、練薄物（薄い紫）の雁衣で、鹿毛の馬に乗る。次は⑮新大納言坊城俊明（43）とみられ、虫襖（白裏）の雁衣で、鹿毛の馬に乗る。次は⑯大納言萬里小路建房

（45）とみられ、薄青（白裏）の雁衣で、青毛の馬に乗る。次は⑰大納言源（庭田）重能（43）とみられ、菊蒔練薄物の雁衣で、青毛の馬に乗る。次は⑱前大納言甘露寺国長（54）とみられ、薄菊（白裏）の雁衣で、青毛の馬に乗る。次は⑲権大納言花山院家厚とみられ、菊の雁衣で、鹿毛の馬に乗る。そして次は⑳左大臣の一条齐信（39）とみられ、「黄菊衣、白単、薄色藤丸織物」の直衣で、鹿毛の馬に乗る。

その後に最も重要な㉑「御輿」と、それを担ぐ「駕輿丁四十人」と「長二人」、その前と左右に㉒「上方御隨身」（番長二名、府生二名、将曹二名。源武常とみられる左将曹は「御剣を持ち、御輿の左に在り」、その後に舍人二人と白と蘇芳の装束の隨身各四名、および㉓「庁官繁直朝臣」とみられる白装束の者が「御沓を持ち」、白張の「御笙」持の後に「下方御隨身」（蘇芳の布衣）六名が続く。

その次は㉔「後騎」の「皇太后宮大夫」徳大寺実堅（35）とみられ、「香スキ白」の雁衣で、月色（白色）の馬に乗っている。記録では続いて、舍人二人、御厩舍人、居飼、諸大夫二人、小雑色六人、および㉕「召次」六人、㉖「御後官人」五人、㉗「上北面」四人、㉘「下北面」七人、㉙「蔵人所衆」四人（合計三十八人）を列挙するが、この絵図には㉚㉛㉜各々の雑色・白張なども含めて五十六人を描く。

その後は㉝「御衣辛櫃」とみられる。ただ、記録に「一合」

とあり「序官紀徳直」のみを挙げるが、絵巻では朱の辛櫃が二つ描かれ、その両脇に各二名および後部に白張の担夫二名と物持四名および従者五十六名が続く。

その次は③②関白鷹司政通(36)とみられ、「薄菊染打衣」の直衣で、鹿毛の馬に乗っている。その後左右に二十五名描かれるが、それは③②の舎人二人、長二人、居飼、諸大夫三人、侍二人、府生二人、番長二人、近衛六人、官人(左衛門少将源隆貞)、看督長、火長、放免、雑色(合計二十五名)にあたる。

その後は③③「車代、空車」とみられ、車副雑人、番頭雑色六人、下品雑色四人(合計十六人)だけでなく、記録にない従者十九名、朱の櫃と担夫二人を描く。ただ、その後は末尾(従者三十二名)とつながらないので、おそらく、間に欠失があると思われる。

下巻は、③④「所司代」の内藤信敦とみられる騎馬の人物(薄色衣の雁衣)が描かれ、その前に袴姿の侍九十六名と後ろに物持九名と袴姿の六名が続く。記録には「前後に武士供奉数輩」としか書かれていない。

御幸の行列の正式な供奉者は以上までとみられる(記録もこの後に「d」へ移る)が、絵巻には続いて騎馬の人物十一名を描いている。それは記録末尾の「i」にいう「今日、内々参向の人々」とみられる。

その先頭は、記録③⑤のうち1「一位」の「武家伝奏」広橋胤

定(55)かとみられる。続いて左右に並んで進むのは、左が2「院伝奏」の前中納言日野資愛(45)、右が3同じく院伝奏の前大納言(下)冷泉為訓(60)、ついで左が4「御会奉行」の民部卿(上)冷泉為訓(48)、右が5「林丘寺室御世話人」前中納言池尻暉房(63)、ついで右が7「修理職奉行」の右兵衛督藤谷為修(41)、左が6「内々禁裏より御供」の前大納言鷲尾隆純(50)、ついで左が8「御献奉行」の刑部卿安倍泰行、右が9の「御楽御用」の三位綾小路有長(33)、ついで左が10「御楽奉行」の三位大原重成(42)、右が11「御楽御用」の三位東久世通岑(33)かとみられる。いずれも騎馬姿で、周囲に十名ほどの従者たちも描かれている。

以上が御幸行列の絵巻に登場する主要な人物である。そのうち、中巻の「公卿」と下巻後半の「内々参向の人々」は記録にみえる。しかし、上巻と下巻前半の見物人(婦女子も)や数百名の侍(袴姿が多い)は、記録に全く書かれておらず、それも詳しく描いたところに、この絵巻の特徴が認められる。

六 修学院御幸中の「御当座和歌」

この文政七年九月二十一日には、御幸先の修学院で御歌会が催された。その「修学院御幸御当座和歌」の写本が香川大学図書館に所蔵されている。その全文を同図書館に諒解を得て、左に翻刻させて頂こう。

修学院御幸御当座和歌

紅葉色深

- (1) 染つくす此山かげの千入にぞめでこし世々の秋もしらる、
(光格上皇御製)
- (2) 此山の紅葉の木陰御幸して幾世の秋の色やそふらん
(関白(鷹司)政通)
- (3) もみち葉もけふを伝えて下枝までそむる深き恵成りけり
(左大臣(二条)齐信)
- (4) 千世の色深き恵の山陰に同じ綿の袖はゆるみゆ
(中務卿韶仁(親王))
- (5) 何もかもちとへて云む初御幸紅葉の秋のけふのけしきは
(従一位藤原(一条)忠良)
- (6) 秋ふかき山の紅葉も待ゑたるけふ事わきて色を染ぬる
(1 従一位(広橋)胤定)
- (7) こゝろ有此山陰の紅葉げけふの御幸に千入そめしは
(入道一位源祐真)
- (8) 露霜に幾しほ染めて君がけふ御幸伝えし山のみみぢ葉
(権大納言藤原(花山院)家厚)
- (9) 今日といへば君が御幸の色深くそめしかひあき山のみみぢ葉
(正二位(甘露寺)国長)
- (10) いく千入色を御幸のけふもちて君が為とや染る紅葉ば
(皇太后宮大夫(徳大寺)実堅)

- (11) この秋は年経る山の紅葉ばもわかえて深き色をみせける
(権大納言(庭田)源重能)
- (12) □□けふと千世の御幸の初□□色もみ□□山の紅葉ば
(正二位藤原(日野)資愛)
- (13) 君を待つ紅葉のあきも幾年とむかしにかへる山路の袖
(権大納言(万里小路)建房)
- (14) 跡らしき君やみるらん此山の木深きもみちいろの成みを
(権大納言(坊城)俊明)
- (15) 幾しほの紅葉の綿羽はへて御幸の秋の色や添ふらん
(正二位(下冷泉)為訓)
- (16) 紅葉みる御幸のけふと染□て山深からぬ秋の色かな
(民部卿(上冷泉)為訓)
- (17) 紅葉ばもけふのみゆきの□□に逢て猶も深入の色を染むらん
(正二位(池尻)暉房)
- (18) 幾千入□□木々の紅葉ばけふの御幸の折にあふかけ
(正二位(鷺尾)隆純)
- (19) 紅葉ば、嬉しき色と幾千入そめて御幸の□□にあるらん
(権中納言(飛鳥井)雅光)
- (20) 君がけふ御池の紅葉染返す千入に千世へ色を深めて
(左兵衛督(高倉)永雅)
- (21) 御幸して君みそなはず為とをやいつにもわきて染る紅葉ば
(参議左大弁(広橋)光成)

- (22) 正三位（高松）公祐
あきを経てかゝる御幸を伝えずばかひなき山の千入ならまし
- (23) ③⑤の7 右兵衛督（藤谷）為修
染そふは今日の御幸の君みよと紅葉色こき山陰の秋
- (24) ③⑤の8 刑部卿安倍泰行
もみぢ葉も君が恵の秋深き御幸伝えて色やそふらん
- (25) ③⑤の9 正三位源（綾小路）有長
千年すむ池水深き秋の色をうつす御幸の山の紅葉は
- (26) ③⑤の10 正三位（源）（大原）重成
あかねさす君の御幸の時を得て染し紅葉ば幾入とかし
- (27) 従三位藤原（飛鳥井）雅久
おりよくも紅葉ば色を幾人に御幸伝えて染わたるかげ
- (28) ⑩左近衛権中将隆起
この秋はわきて千入の色ぞこき御幸伝えし山の紅葉ば
- (29) ⑨右近衛権中将（橋本）実久
いろ深く染し紅葉は今年より君が御幸の千世を染らん
- (30) ⑧左近衛権中将源（六条）有言
そめかへ木々の紅葉の幾千入秋の御幸の折に逢かけ
- (31) ⑦右近衛権少将藤原保右
待ゑたるゑ御幸を千世の初入に染むるも深き山の紅葉ば
- (32) ⑥右近衛権中将（上冷泉）為全
いく千入御幸に愛る紅葉ばは色の盛をけふ□□のかげ
- (33) ⑪藏人頭右大弁顕孝
そりすける御幸の朝に立かへり猶色深く有しもみぢば
- (34) ⑤藏人頭右中弁（柳原）隆光
千々の秋千入を伝て紅葉ばも御幸やよとふけふを初めに
- (35) ④藏人権右（少）弁（日野西）光暉
恵みあればけふの御幸につかへ来て色深くみる山のもみぢば
- (36) ③左兵衛権位（裏松）恭光
長月のけふの御幸のかずあはで深くも染るあきの紅葉ば
- (37) ②藏人民部丞大江俊常
君がけふ御幸の山の紅葉ばはふかき恵のいろにぞあらん
- (38) ①藏人右近将監（大江）俊距
かしこさの色をも深く染てけり御幸の山の木々の下くさ
- 同日（九月二十一日）於_ニ窮邃軒_一御当座
院御題／水樹多佳趣
題者奉行等 為則卿
（光格天皇御製）
- (39) 々のかげうつるけしきも岩伝ふたきのひ、きもすめる池水
（光格天皇御製）
- (40) 32（鷹司）政通
かげやはほのながめとほし□に千代くりかへす滝の白糸
- (41) 20（二条）斉信
更に御池の水の底すみてみどりをうつす千世の玉松

(42) 風もけふわがことにしらせつ、千世の声すむ池の瀧波
 (43) 月のけしのの御幸を松がども水も緑の色をそふらん
 (35) (広橋) 胤定

(一条) 忠良

付論

『光格天皇新造内裏還幸絵図』解説の追補

所 功

このうち、(1)と(39)の御製は、『列聖会集』(のち『皇室文学大系』)に収録されているが、他の四十一首は今のところ他に見あたらない。詠進者は、記録と絵巻にみえる公卿クラスの二十三名(32)(20)(35)は重出)および絵巻にみえない六名(一条忠良は重出)である。

前掲の記録(e)(f)によれば、当日の御歌会は「未剋(午後二時)ころから、修学院内の「窮水」(窮邃軒)で催され、また「戌剋(午後八時)ころから「管弦」を楽しまれた。その上で「子終剋(午前一時すぎ)修学院を発ち、松明に導かれて「寅初剋(午前三時すぎ)仙洞御所の「本殿」へ還御しておられる。かなり大規模な、しかもゆったりした御幸であったことが窺われる。

末筆ながら、この絵巻については、徳島県立博物館の学芸員大橋俊雄氏から、貴重な参考資料を送っていただいた。また、末尾の御当座和歌については、解説原稿を奈良女子大学古代学術研究センターの樋口百合子氏に補訂して頂いた点が少なくない。あわせて心から感謝の意を表する。

本誌『モラロジー研究』の前号(本年六月発行)で当センター所蔵『光格天皇新造内裏還幸絵図』(折本)の史料紹介をした。その際、校了直前に受贈した野村玄氏の力作「近世における天皇の地位と正当性―大刀契・劍璽・通過儀礼及び皇統の扱いに注目して―」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第五十七号、平成二十九年三月発行)の抜刷を急いで拝見した。

その中に、前号の拙稿でも注目した「大刀契」は、南北朝頃から所在不明(消失か紛失したか)といわれてきたが、この還幸行列絵巻などの中で、「鈴鑑櫃」と共に「大刀契櫃」も描かれているのは、光格天皇により朝儀再興の一環として復活されたからではないか、という推定が、確実な傍証に基づき示されている。そこで私は、同氏の「結論」を拙稿の末尾に紹介し、「その可能性が高い」と付記した。

それから暫く経って、野村論文を精読したところ、さらに多くの貴重な史料が引用されており、前号拙稿の不備を補強するものであることに気付いた。遅ればせながら、同氏の史料精査に感謝し敬意を表したい。

さらに、前号の発行直後、当研究センターの久禮且雄研究員がネット検索していた際、寛政二年（一七九〇）の還幸行列に関する重要な史資料があり、しかも既にデジタル公開されているものを見出してくれた。これも拙稿の不備を補強するものであり、同氏の情報提供に謝意を表する。

そこで、野村氏と久禮氏から教えられた史資料のうち、宮内庁書陵部などへ出向いて調査し、また関係機関に問い合せて確認できた主要なものをここに紹介し、前稿の追補とする。

宮内庁書陵部所蔵の還幸絵図と記録

まず野村論文の末尾（註の後）には、九点の絵図等がカラー（c）とモノクロ（m）で掲載されている（この論文は現在WEBに掲載されている。すなわち、

- (1) c写真① 『新嘗祭之図』（原在明筆 宮内庁蔵御物）
- (2) c写真② 『公事録、附図、恒例下「新嘗祭還幸之図」』（宮内庁書陵部蔵）
- (3) c写真③ 『Emperor Kokaku Returning to the Capital』（「光格天皇還幸図」屏風、ボストン美術館所蔵）
- (4) c写真④ 『光格天皇御讓位絵巻』（原在明筆、宮内庁蔵）
- (5) m写真A 『旧譜 皇統譜』（宮内庁保有行政文書）
- (6) m写真B 『光格天皇御還幸行列絵巻』（石田守善画 宮内庁書陵部所蔵）

(7) m写真B 「裏松固禪 南庭桜橋在所勘文案等」（東京大学史料編纂所蔵裏松家史料）

(8) m写真 「炎上三付 神器御無難其他存在消失御品等届」

（『公文録』明治六年五月 国立公文書館所蔵）

(9) m写真 『大統譜』「明治天皇明治^(A)一年度」（宮内庁保有行政文書）

以上である（写真としては二十六箇所）。このうち、(1)と(2)は、「宮内庁蔵」と記されているが、京都御所東山御文庫所蔵の「御物」であるから、直接拝見することが難しい。ただし、(1)は霞会館の展覧会図録『仁孝天皇―泰年の余芳 幕末の宮廷と柳営―』（霞会館、平成十五年）に掲載され、また(4)も同展覧会図録『光格天皇と幻の將軍―京都・日光・御幣使―』（霞会館、平成十三年）に掲載されている。さらに(2)は、すでに全容が『図説 宮中行事』（嗣永芳照氏監修、同盟通信社、昭和五十五年）としてカラーで出版されている。

けれども、(1)や(2)の新嘗祭図に、紫宸殿と神嘉殿の往復行列で「鈴鑑櫃」と「大刀契櫃」が描かれていたことは、残念ながら気付かなかった。それゆえ、昨年京都の古書店から入手して本誌の前号にモノクロで全容を紹介した還行列絵図（彩色）が「鈴鑑櫃」と「大刀契櫃」を描いていることに驚き、関係史資料を調べて前号に中間報告したのである。

ところが、野村論文で(6) m（写真B-1・2）に示された

「光格天皇御還行行列絵巻」巻二は、当センター所蔵の前号掲載絵図と全く同じ絵柄だとみられる。

そこで、この絵巻を宮内庁書陵部に赴いて精査したところ、まさに「行幸の鹵簿を詳細に描いた絵巻」である。しかも、当センターの絵図（折本）は、記録によって知られる行列の後半に相当する部分を欠失しているが、書陵部の絵巻は後半も完備している。まことに有り難いことである。

この書陵部所蔵『御遷幸之図』（B六一八四〇）全五巻は、当センター所蔵の『寛政内裏遷幸行列絵図』と大部分同内容であるが、子細に対比すると、若干の異同が見出される。その最も大きな違いは、当センター本が、行列前半部分だけで、後半部分を欠失していることであるが、書陵部本の末尾に左のごとく明記されている。

法橋探真斎藤原守善写 □（印「守善」）

この藤原守善は「（石田）幽汀の次男。幼名は酒之介、通称は栄三郎、名は守善。画を父に学び、山水・花鳥を能くする。寛政五年（一八九三）没。三十才」（『美術人名辞典』思文閣）とみられる。「写」とは、原本を写したとも自ら描いたとも解されるが、後述のとおり前者だとみられる。しかし、寛政二年の還幸行列を直接拝見した可能性もある青年絵師により、三年以内に筆写された絵図として、十分価値があると思われる。

その内容は、当センター本にある前半部分と大筋一致する

が、人物の注記は当センター本の方が少し詳しく、位置も僅かに異なっている。書陵部本になく当センター本にある注記は左の箇所である。

①中井正紀の後に続く従者に「同心」「四人」「徒士」「四人」と記す。
②井上利慕の従者に「侍」が「四人」「徒士」が「三人」と記す。

③渡辺頼統の従者に「侍」が「四人」と記す。
④下雑色が「八人」、⑤上雑色が「四人」、⑥「三口御門番」が「四人」、⑦「御附組同心」が「六人」、および⑧「六口御門番」が「六人」と記す。

⑨立入経康に「朝臣」、⑩石井在覚に「宿禰」、⑪小林家仲に「朝臣」、⑫壬生敬茂に「宿禰」、⑬土御門泰栄と⑭高津康造と⑮前波景満に「朝臣」と各々記す。

⑯榑田久連に「橋」、⑰鈴木宗名に「紀」と記す。

これだけみると、前者にない注記が後者で補記されたように思われるかもしれない。しかし、逆に当センター本になく前者（書陵部本）にある注記として、⑱「坊城左大弁宰相」に「俊親卿」、⑲「四辻右宰相中将」に「公萬卿」、⑳「高倉宰相」に「永範卿」、㉑「四条新宰相」に「隆帥卿」、㉒「六条宰相中将」に「有庸卿」、㉓「千種三位宰相中将」に「有政卿」、㉔「葉室中納言」に「頼熙卿」、㉕「三条西中納言」に「延季卿」、

④9「冷泉中納言」に「為幸卿」、⑤0「中山左衛門督」に「忠尹卿」、⑤1「日野権大納言」に「資矩卿」、⑤2「醍醐大納言」に「輝久卿」、⑤3「花山院大納言」に「愛徳卿」、そして⑤7「一條左大臣」は「輝良卿」と書かれている。

しかも、⑤3の次は、当センター本に「転法輪権大納言」と記されるが、書陵部本では「三条大納言実起卿」と書かれている。「転法輪」は三条家の別称である。

従って、両本は単純な親子関係でなく、むしろ親本を別々に転写して各々に注記を若干加筆した兄弟関係にあるものとみられる。

一方、当センター本で欠失している後半部分（書陵部本の第三巻途中から第四巻・第五巻の終わりまで）には、左の人物（いずれも騎馬）と従者が描かれている。それに前号拙稿で引いた柳原均光『日次記』の「行粧」（行列）に冠した（ ）番号を加えて示せば、左の通りである。

(44) 調子左近府生武里／（ク）鳥山左近府生吉文／（ク）三上左近曹秦常斐／（ク）渡辺左近将監供国

(45) 梅園少将実兄朝臣
番長代

(46) 二條左大将治孝卿／(47) 正親町三條少将公則朝臣／
(48) 清水谷中将公寿朝臣

(49) 土山右近府生武雄／（ク）水口右近府生身人部清起／
（ク）水口右近将曹身人部長清／（ク）調子右近将武敬
(50) 中園少将実綱朝臣
移馬

(51) 久我右大将信通卿／(52) 園池少将公翰朝臣
(53) 滋野井中将公敏朝臣
御列奉行

(55) 御鳳輦／万里小路中納言／桐九／久世三位
(56) 正親町中将実光朝臣／(57) 水無瀬少将成貞朝臣
(58) 松木中将宗章朝臣／(59) 大宮少将盛季朝臣

東豎子
重廉左大史為秀女（※馬上の公卿は扇子で顔を隠す）

※以下「御遷幸之図 四」

(60) 勧修寺右中弁良顕朝臣／(61) 葉室侍従頼寿
(62) 細川縫殿助常方／(63) 馬（烏）丸侍従資重

(64) 小野主殿職登／(65) 押小路掃部頭師武
(66) 萩原右兵衛権佐従宮朝臣／(67) 村林右兵衛大尉喜膳

(68) 穂田大舍人頭貞積／(69) 栗村図書頭義清
(70) 今大路内蔵権頭孝廉／(71) 牧内通頭義謙

(72) 生嶋大蔵少輔宣由 (73) 難波宮内権大輔愛敬
(74) 小森典葉頭頼望／(75) 浜島内膳泰膳清章

- (76) 橋本主水佑信益 / (77) 田中大膳亮雅胤
 (78) 阿波大炊頭通和
 (79) 徳岡造酒佑盛隆 / (80) 牟田木工権頭元敷
 (81) 高橋兵庫頭俊寿 / (82) 生嶋雅楽頭儀重
 (83) 柳原右衛門権佐均光 / (84) 堀河右衛門大尉忠弘
 御列奉行
 前駟諸大夫 同 / 右府生 / 左番長 右府生 / 右番長

※以下「御遷幸之図 五」

鷹司関白 (※牛車)

御後官人

医師 / 御園主斗助 / 浦野右近 / 山本主殿 / 三角大炊 / 畑大蔵 /
 御菌玄蕃頭 / 御賄頭 / 御前書 / 御在武家盃刀 / 同同心 / 三口御
 門番 / 水分撰津守保明 / 有田播磨守貞膳
 御見付 / 能登守十郎重胤 / 御奉行 / 菅沼下野守定喜
 所司代 / 太田備中守資愛 / 公用人 / 公用人 / 公用人

法橋探真齋藤原守善写 □ (守善、朱印)

このように書陵部本の後半部分は、当センター本の欠失部分を詳しく描いている。そのみならず(84)後の「御列奉行」の人々は、柳原均光の『日次記』にすら書かれていないが、絵図入りで示されており、しかもその一人一人が、別途民間で作

られた後掲本より精密に描かれている。

もうひとつ、野村氏は書陵部所蔵の記録『寛政御遷幸之記』(筆者未詳)を、論文に「史料一」として掲出された。これは後に論ずる内容と深く関係するので、要点を引用させて頂く(句読点を加える)。

御道筋ハ、聖護院より黒谷街道を南へ、三条を西へ、堺町を北へ、御築内の内、凝華洞の東の方の広小路を西へ、直ちに南門へ入御します。(中略)

三条の橋、造り替られ、小路ハ民家の床を土間と等しく切下て、京洛の老若・緇主等ハ言不_レ及、浦安四隅の洲々津々浦々の者までも伝へ聞て、天の君の御幸拜まんと、千里を遠とせず、海山を超て洛に来るもの幾千万ぞや。

これによれば、光格天皇が仮御所の聖護院から新造内裏へ還行された道筋は、かなり大廻りしている。いったん黒谷街道を南下し、ついで三条通を西へ行き、さらに境町通を北上し、内裏の築地の凝華洞の東方の広小路を西へ進み、南門(建礼門)から入御、というルートを通られたこと、その道中が相当に改修され、たとえば三条の橋を造り替えたり、小路の民家では床を土間と同じまで切り下げたりしたこと、その行列を見物するために、老若男女も僧侶らなども全国各地から上洛してきたこと、などを知りうる。

本居宣長の長歌と木版『還幸御行列之図』

この還幸行列を屏風絵にしたのが、前掲③（野村論文の写真3）である。その左双には、聖護院を出て三条の橋にさしかかった鳳輦が描かれ、また右双には、「鈴鑑櫃」と「大刀契櫃」が見え、さらに道端で見学する人々も確認できる。

その見物人として、自ら記録を残したのが、本居宣長である。宣長は寛政二年十一月初めに還幸の噂を知り、直ちに準備して伊勢の松坂を発ち、京都へ着いて知人宅に泊った。そして二十二日には、聖護院の近くで還幸行列を望拝し、事前に入手したとみられる行列次第（長帖）に印を付けた（その長帖が同館HPに掲載されている）。そのみならず、当日の感銘を次のような長歌に詠んでいる（筑摩書房『本居宣長全集』第十五巻。歌に濁点を加える）。

寛政二年十一月廿二日の日かり宮より新大宮に御うつろ
 ひの大みゆきを見奉りてよめる
 掛けまくも あやにかしこき 天皇の 神の尊 うつそみ
 の 世の事なれば わがこもを かりなる宮に しましく
 は 大まし／＼ぬ しかれども まそみの鏡 あきらけき
 大御心は 天地に 照たらはして 咲花の にほふがこと
 く さかりなる 大御世なれば ものごとに さかゆく時
 に も、しきの 大宮すらを あふさわに 思ひてあらめ
 や いにしへの かたち尋ねて まくはしく 造りなさむ

と 神ながら おもほしめして 天命 おほせ給へば 天
 地の 神あひうつなひ もろ／＼の よさしのつかさ 手
 人ども 大たくみらも 大きみの みことかしこみ 家わ
 すれ 身もたなしらす ぬば玉の よるひるといはず い
 そしみて つかへまつれば あらたまの としだに経すて
 玉しきの 平安の宮は 又さらに ひかりてりそひ 玉の
 ごと 造りみかけれ 玉のごと 照たる宮の 瑞宮の こ
 の新宮に むくさかに うつりいますと 御尾前の 御と
 もあともひ 馬車 きものとり物 まつふさに いたりよ
 るひて 冬こもり 春かたまけし 霜月の けふのたり日
 に 天のはら 豊さかのほる 朝日影 にほひかがやき
 大御鳳輦 よそひた、して いやさきに いだし車の そ
 め屋形 道もてるかに 百たらず 八十とものをは ゆく
 雁の ひきつらなみて かきかぞふ 八くらのつかさ 物
 申す つかさつぎたち もとしげく 春咲花の 桃の花
 名におふまちの 其殿の 大まへつきみ 雲のうへ ちか
 きまもりの まへつ君 左みぎりと 馬なへて 弓とりも
 たし 二つらに 分れつらなり 大御さき つかへまつら
 し ひさかたの みそらにたかゆく 鷹つかさ 殿の命は
 食國（おすくに）の 事とり持て 天の下 まをし給ふと
 ゆくらかに のらし給へる を車の 牛のあゆみの のど
 かなる 御世のかためと 御しりへに た、し給ひて 玉

ほこの 道の長手を たもとほり 大路に出て 鳥がなく
あづまに通ふ 白雲の あはたのやまを ささ竹の そか
ひに見つゝ たくふすま 白川わたり おきにすむ 青羽
の鳥の かも河の 清き川瀬に さす竹の 大宮人の 花
衣 きそなふ袖の 色々の 影もうつりて そらかそふ
大はし小橋 馬のつめ ふみとどろこし つぎくくに い
ゆき渡らし 大御城の 内に入たち 日の豎の 大路をを
れて 日のよこの みちゆきすゝみ 九重の 外の重を過
て 中の重に 入ますはしに 打あぐる つづみのひびき
ふきなすや 笛のしらべは み雪ふる 冬ともいはず 春
日なす 空もうらゝに はろくくに ききのよろしく 水
垣の 久しく絶し 遠御代の 跡をたづねて 古に 又立
かへり 望月の たらはしたてる 大殿を 萬世までに
いや高に たかしますと あらたなる その内の重の
大御かど 指て入ます 今日此 大行幸をし あまさか
る ひなの國への いやしきや 御民われらも 風のとの
とほとに聞て ともしみと のほりまる来て しゝじもの
いはひをろがみ 天つ空あるき見まつる ことのたふとさ

反歌

いやたかに みつのにひ宮 しきそめて 御世は榮えむ
萬代までに

さらに、この行列を拝見して全容を絵図に描き、翌寛政三年

正月、それを出版した人がいる。その『光格天皇還幸御行列之図』は、木版本であるから、少なからず現存しているであろうが、幸い早稲田大学図書館所蔵本は、既にカラーでデジタル公開されている。

しかも、それが二種類ある。一つは横長の袋綴本（二冊）、もう一つは、それを開いて継ぎあわせ卷子装にしたもの（二巻）で、全く同じ刷物であるが、前掲の(6)と同様、当センター本にない後半の部分も描かれている。

そこで、この木版本の表紙と序文および行列絵図の全体に加えられている注記（官名・人名など）の文字を左に翻刻し、さらに、前号紹介の当センター絵図に欠失している後半部分の写真を、翻刻の後に掲載させて頂こう。

凡例一 この「御行列之図」は、早稲田大学図書館に所蔵される木版の袋綴本と卷子本（同一内容。デジタル公開）である。

一 その文字部分を抽出して翻刻する。袋綴本に打たれている丁数を「1オ」「1ウ」として示し、一部の漢字・平仮名の右（ ）内に字を充てた。

一 行列中の主要な人物の右肩に、前号掲載の記録（柳原均光の『日次記』の(0)～(89)と絵図の注記①）

⑤7を示した。

(表紙)

御行列之図

(印) 神田町燦籠町壹丁目拾番地

三河屋幸三郎

(序文) ※1才・1ウ (この部分難解、読み取り不正確)
 夫異変は今こそすべからず。去ぬる天明八、つちのえ申の
 年二月朔日、内裏御炎上にて聖護院宮の御殿を御仮／皇居
 となさしめらる。但し天命下り大造営すみやかに／なり、寛
 政二かのえ戌のとし十一月二十二日、新造 内裏へ御遷幸
 希なる御大／礼にて、供奉の御面／々々敷難有尊とき御
 行粧なり。これを拜見／せざる人のためにと御紳／縉家、右御
 行列の大略を御うつし、既に御蔵／書となしおかる。故あつ
 て今／般、是を小子に伝託し□。熟／□の人へは、此御図書は
 実に諸悪難を除き萬願なるのまもり、慎て高敬あるべき
 を達し、付与すべきの条、命ぜらる。しかし齧／ものにはあ
 らず。依て聊／このみを尽して、以て四方へ告るとしかいふ。
 寛政三かのとの亥年三月／越州 源宜謙、慎みて記之。

(本文)

2才

不許翻刻

寛政二庚戌年十有一月二十有二日

天皇御遷幸御行列之図

供奉之面々也。同例者則煩多故、省略也焉。於目録
 書一写絵圖二而附会／之而以可レ觀レ之也。
 近国之大名中上京而御固。

2ウ

さかひまち御もん

3才

おんみちきよめ

3ウ

すはう ぼうつき

4才

かなばう

4ウ

出車 かしわらはとねりうしかひ

5才

おんともぐるま かけはしちぐ

5ウ

かへうし あまかわ

6才

水谷右兵衛少志

6ウ

小林左兵衛大尉

7才

石川撰津守

7ウ

立入左京亮

8才

藤波三位殿

9才

おほとねりいちびはむまぞひ

10才

おほとねりいちびはむまぞひ

11才

おほとねりいちびはむまぞひ

12才

おほとねりいちびはむまぞひ

13才

おほとねりいちびはむまぞひ

14才

おほとねりいちびはむまぞひ

15才

おほとねりいちびはむまぞひ

16才

おほとねりいちびはむまぞひ

17才

おほとねりいちびはむまぞひ

18才

おほとねりいちびはむまぞひ

19才

おほとねりいちびはむまぞひ

| | | | |
|-----|---|-----|--|
| 7ウ | くつだい <small>(香台)</small> ／あぐら | 7ウ | ぞうしき <small>(雑色)</small> ／さんだいがさ <small>(香)</small> ／くつ |
| 8オ | さんだいがさ／しきがわ | 13オ | 五条少納言殿 <small>(童)</small> ／わらは <small>(雑色)</small> ／ぞうしき |
| 8ウ | 小川弾正少忠 <small>(4)</small> ／ざうしき | 13ウ | さんだいがさ |
| 9オ | 同 <small>(12)</small> ／左衛門府 <small>(24)</small> 広橋左衛門権佐殿 | 14ウ | 六条宰相中将殿 <small>(28)</small> ／千種二位宰相殿 <small>(29)</small> ／葉室中納言殿 |
| 9ウ | ゆみ <small>(ゆみ)</small> ／ずいじん <small>(随人)</small> かどのをさ <small>(看督長)</small> ／あぐら | 14オ | 四辻右宰相中将殿 <small>(28)</small> ／高倉宰相殿 <small>(29)</small> ／四条新宰相殿 <small>(30)</small> |
| 10オ | 左兵衛府 <small>(13)</small> 山形左兵衛大尉 <small>(14)</small> 堤左兵衛権佐殿 | 15オ | 三條西中納言殿 <small>(34)</small> ／中山左衛門督殿 <small>(36)</small> |
| 10ウ | 陰陽寮 <small>(15)</small> 土御門陰陽頭殿 | 15ウ | ※記録(35) 絵図(49)に「冷泉中納言(為章)あり。 日野権中納言殿 <small>(37)</small> ／醍醐大納言殿 <small>(38)</small> |
| 11オ | 威儀御馬 <small>(32)</small> (二頭)／こんゑ <small>(33)</small> ／ちぶ <small>(馬添)</small> ／むまぞひ <small>(馬添)</small> | 16オ | 花山院大納言殿 <small>(39)</small> ／三條権大納言殿 <small>(40)</small> ／一条左大臣公 <small>(41)</small> |
| 11ウ | おんうちくら <small>(御内藏)</small> | 16ウ | はんちよう <small>(僧長)</small> |
| 12オ | 外記局 <small>(20)</small> 山口少外記 <small>(24)</small> | 17オ | ろうとう <small>(郎党)</small> ／とねりのてう <small>(舎人長)</small> ／むまぞひ <small>(馬添)</small> ／いかひ <small>(雑色)</small> |
| | あぐら <small>(21)</small> ／しきがわ <small>(22)</small> ／こんゑ <small>(23)</small> ／おんから <small>(御辛)</small> ／ひつ <small>(概)</small> | 17ウ | ざうしき <small>(雑色)</small> ／くつだい <small>(香台)</small> |
| | 鈴鑑 <small>(21)</small> 榊田左近将監 <small>(22)</small> | 18オ | ※当センターの絵図は以上前半のみ(以下欠失) さんだいがさ <small>(童)</small> ／してう <small>(仕丁)</small> |

18ウ 近衛代 土山右近府生／同 調子左近府生
府生 水口右近府生／同 鳥山左近府生
くつ／あぐら(番)

将曹 水口右近将曹／同 三上駿河守

19才 くつ／あぐら

将監 調子右近将監／同 三上左近将監

19ウ してう(仕丁)／ぎうしき(雑色)

⁽⁵⁹⁾大宮右少将殿／水無瀬左少将殿／⁽⁵⁸⁾中御門右中將殿(成貞)
⁽⁵⁶⁾正親町左中將殿／久我右大将殿／⁽⁴⁶⁾二条左大将殿(宗章)

20才 だんじ(彈正)ようだい(台)／とねり(舎人)

20ウ ずいしん(隨身)

⁽⁵³⁾滋野井右中將殿(公殿)

21才 ⁽⁵⁰⁾中園右少将殿／⁽⁴⁵⁾梅園左少将殿(実兄)

むまとねり(馬舎人)／しきかわ(敷皮)

びろうげ(檜郷毛)のおんゑい(御醫)／みつなしてう(御綱仕丁)二十八人

みみこし(御奥)のてう八(人)にん

御鳳輦(55)

22才

とうしよう(堂上)四にん／がよてう(駕輿丁)六十にん

しつゑい(執醫) はものぶだひ

23才 四辻右中將殿／裏辻左中將殿

※記録には右の両名見当たらず(48)「中将(清水谷)公寿朝臣」を記す。

23ウ じよぼく(如木)／ずいしん(隨身)
くつ(番台)だい(胡座)／あぐら

⁽⁵²⁾園池右少将殿／⁽⁴⁷⁾正親町三条左少将殿／東豎子 虫鹿参河

守娘

職事 勧修寺頭(良頭)弁殿(雑色)／むまどねり(馬舎人)／わらは(童)

24才

あぐら(胡座)／しきかわ(敷皮)

極薦 細川縫殿助 主殿寮 小野主殿助

⁽⁶⁵⁾掃部寮 押小路大外記 図書寮 小川図書頭

⁽⁷⁰⁾内蔵寮 今大路内蔵権頭 内匠寮 牧内匠頭

⁽⁷²⁾大蔵省 生島大蔵少輔 宮内省 難波宮内権少輔

⁽⁷⁴⁾典薬寮 小森典薬頭

⁽⁷⁵⁾内匠司 浜島内膳正 大膳職 田中大膳亮

⁽⁷⁶⁾主水司 橋本主水佑 大炊寮 河野大炊頭

⁽⁷⁹⁾造酒司 徳岡造酒佑 木工寮 平田木工権頭

⁽⁸¹⁾兵庫寮 高橋兵庫頭 雅楽寮 生島雅楽頭

右衛門督 堀川右衛門大尉 同 柳原右衛門権佐殿(83)

かどのをさ(看督長) わらは(童)は／ずいじん(火長)／26才 ぐわてう(諸大夫)／あぐら

25ウ 鷹司関白公 ぜんくがさ(諸大夫)／しよだいぶ

26ウ

むまどねり(馬舎人)／いちびはぐき(番)／ばんじやう

27才

ふし(府生)よう(添)／そへう(牛飼)しかひ

27ウ

28才 くるまぞひ(車副)／とねり(舎人)／じてう(仕丁)

28ウ ちぐ(添牛)／うけはし／うけづえ／あまかわ／じてう

29才 そへう(看督長)し／こんゑ(馬舎人)／29ウ ざうしき(雑色)／くつ(香)

30才 かどのをさ(看督長)／むまどねり(馬舎人)／じてう(仕丁)

御後官人 小佐治右衛門大尉

30ウ ねじりほこ(火長)／くわてう

31才 ろくもん(六文)／かなぼう(金棒)

31ウ 武家数頭(徒歩)／かち

32才 ちゆうげん(楯)／やり(槍)／さむらい(侍)／くつ(香)／かさ(傘)／

し(床机)／うぎ(敷)／をさゑ

32ウ 主殿部代(とのもりぶだい) 一御輿長(みごしのちやう)

一御綱駕丁(みつながてう) 一舎人長(とねりちやう)

一番長(ばんちやう) 一近衛(ちかえ)

一移馬(いば) 一隨身(ずいじん)

一火長(くはちやう) 一如木(いちぼく)

一斎郎(さいちやう) 一省堂代(しやうだうだい)

一馬副(うまのふ) 一馬部(うまぶ)

一牛飼(うしかひ) 一小童(わらは)

一駕輿丁(かどのをさ)

一舎人(とねり)

一郎堂(ちやうだう)

一看督長(かどのをさ)

一雑色(ざうしき)

一車副(くるまのふ)

一居飼(いかに)

一仕丁(じてう)

右のしやうぞく、くはしく図すること／かなはず。今もんをつけ、これをわかたつ。／堂上がた地下のしゆうともに、各／官職によつてどもの者等有て／一人も多少ならず、諸／用具持、別どもの分 御道すぢ／なし 別道を往来す。

33才 三河(甲) 神田燦籠町壱丁目拾番地／三河屋幸三郎

御印 □ (紬殿蔵書)

※袋綴本、裏表紙(紺色)に「三河屋幸三郎」の印あり。

これを通覧すると、この木版本『御行列之図』は、本文の2才に断るとおり、供奉の面々であつても同じ例は煩が多いので、かなり省略してしまい、官名・人名をまとめて記す(8才に七名、10ウに七名、13ウで五名、14オウで六名、15才で五名、19ウに六名、24ウに九名、25才に十名)。また12才に「鈴鑑」の櫃は描くが、「太刀契」は13ウに名称を記すのみですませている。とはいえ、当センターの絵図に欠けている後半が、18才以下に描かれているので、その部分を末尾にモノクロ写真で掲載して参考に供する。

「鈴鑑櫃」と「隠岐国駅鈴」

ところで、この還幸行列には、前述の「大刀契櫃」と共に「鈴鑑櫃」が出ている。野村論文によれば、大刀契は中世から途絶えていたものを今回復活して行列に加えられるとみられる。ところが、鈴については「後西天皇・靈元天皇・中御門天皇・桃園天皇の劍靈渡御の行列(記録)により、宝剣」と神靈及び「鈴」の存在が確認できる」という。

ただ、伊藤純氏の「隠岐国駅鈴と光格天皇」(『大阪歴史博物館』)

館研究紀要』第十五号、平成二十九年三月発行、デジタル公開）によれば、還幸行列の鈴櫃には「隠岐国駅鈴」が用いられたとみられる。その経緯を略述すれば、この還幸より四年前の天明六年（一七八六）、隠岐国造の後裔と伝えられる億岐家の当主が、家宝の駅鈴を持参して、朝廷からも信頼の篤い崎門学者の西依成斎と石門心学者の並河湛一に見せた。すると、特に並河（懷徳堂教授）は、これを古代以来の本物とみなして高く評価し、その噂が天聴に達して、光格天皇の勅覧を賜るに至ったという。しかも翌七年に内裏が焼失し、三年近く聖護院に居られた光格天皇は、寛政二年（一七九〇）新造内裏へ還幸される際、隠岐から駅鈴を召し寄せられ、それを朱櫃に納めて行列に加えられた。その後、駅鈴を隠岐へ返す時、朱櫃も下賜されたという伝承がある。

この「隠岐国駅鈴」は、律令制下に送られたものかどうか判定し難い。しかし、それを御覧になった光格天皇が「鈴鑑」も「太刀契」も平安以来「劍璽」に準ずる宝器として重んじられた来歴認識しておられた。それゆえに行幸の際に帯同する古儀を復活されたとすれば、十分に意味がある。

ちなみに、これより百五十年近い前であるが、宮内省編『後光明天皇実録』の寛永二十年（一六四三）十月三日条（二六〇五二頁）所引『後光明院御元服即位等記』（無窮会神習文庫に草稿本あり。筆者「頭左中弁」）に注目すべき記事がみえる。

これは紹仁親王（11）が父君後水尾上皇（48）の「仙洞」において「御元服」の儀を行われた後、十月三日、異母姉の明正女帝（21）から皇位を譲られた際の詳細な儀式次第である。その中に左のごとく「木契」や「駅鈴」がみえる（句読点・返点・送り仮名を加える）。

大臣仰^{だいじん}ニ書^キテ内記ニ令^レ進^メ木契并^ニ硯^ヲ〔木契人筥^ニ…〕…次^ニ大臣取^リ書^テ各書^キ木契ニ銘^ヲ、書^キ畢^リ給^ニ内記^ニ〔人^レ筥^ニ〕、令^レ訓^マ之^ヲ。…

次^ニ大臣更^ニ召^シ内記^ヲ賜^フ木契^ヲ〔右片三枚〕…〔右片三枚…〕、大臣便^チ賜^フ木契^ヲ於^テ少納言^ニ〔右片三枚。是^レ納^ニ鈴櫃契^ニ也。〕…納言賜^レ之^ヲ率^テ主鈴^ヲ退出^ス。（※草稿「裏分^チ為^レ少納言^ニ主鈴^ニ封^ニ勅符^ヲ。…）大臣宜^シク固関使^等御馬賜^ヘ。…大臣賜^リ革袋^ニ仰^テ云^ク、伊勢国^ニ罷^テ鈴鹿^ノ関^ニ固^メ衛^レ。近江、美濃同^ジ之^ニ。使^等称^唯退^ク。…

太政官符 伊勢国司／使（二名省略）

勅符壺通／駅鈴式口、壺口伍刻。

近衛式人、従各老人

右^ニ為^テ国守^ト彼国差^シ件^ノ等人^ヲ給^レ契^ヲ發遣^ス。国宜^シク承^知、准^ジ固関使^ニ、依^レ例^ニ施行^ス。符到^ラ奉^行セヨ。

正四位上行左中弁藤原朝臣 従四位上行主殿頭兼左大史小槻宿祢奉

寛永廿年十月三日

(※近江国司と美濃国司への太政官符も同文)

これによって、讓位による「劍璽」渡御の際、「木契」と「鈴櫃」が用意されたこと、その木契は、平安初頭以来の「三関」（伊勢の鈴鹿、近江の相坂、美濃の不破）を固めるために、国名を書いて「鈴櫃」に納められたこと、その勅符と木契は「主鈴」が「鈴櫃」に封じ納めたこと、三関の国司に下される太政官符には古式どおり「駅鈴」に駅伝の刻数を示していたこと、などが知られる。

もちろん、三関の官符など実体のない作文であろうが、讓位儀式に際して、「木契」や「鈴櫃」を必要とする認識が江戸初期にもあつたことは認められる。

光格天皇より將軍家齊への下賜御製詩

なお、寛政二年に完成した新造内裏は、光格天皇からの強い要望を受け容れた幕府の協力（特に老中松平定信の尽力）により、平安朝風の内裏復元を目差して行われた。実際に再現されたのは一部に留まるが、それでも天皇は満足に思し召されて、將軍徳川家齊に感謝する御製の漢詩を賜っている。

それに感激した家齊は、その御製漢詩を自ら筆写して、造営奉行を務めた松平定信に贈った。それが定信を祀る三重県桑名市の鎮国守国神社に伝存し、桑名市教育委員会からカラー写真

がデジタル公開されている。

この御製は、まもなく識者などにも広まったのか、尾張藩の深田正韶編『天保会記』（細野要齋の鈔本、「名古屋叢書」三編、第十三卷一一〇頁所収、昭和六十二年刊）の中に、次の如く引載されている（これは太田正弘氏の御示教による）。

○今上兼仁天皇、新造内裏の還幸の後（寛政二年庚戌）手書して／征夷大將軍に賜りし御製

遥慕^{カニ}周文^ヲ 固不^レ羨^マ漢武台 旧章^{一ニ}是率^ヒ新築本非^レ催^{スニ} 百土忽^ニ告^レ竣^ヲ 整^テ駕^ヲ自東廻^ル 拭^レ目^ヲ九重^ノ裡 九重美哉^{ナルカナ} 兩殿^心規矩^ニ 四門^総崔嵬^ス 燕雀^〇簷^ヲ集^リ 桜橋^挾階^ヲ裁^フ 豈^ニ其^レ為^ニ逸豫^一 講^シ札^ヲ共^ニ徘徊^ス 委^テ佩^ヲ群僚^会シ 將^テ幣^ヲ九州^来ル 素心^既已^ニ足^ル 起臥^感 塩梅^一欣然^{トシテ} 歌^ノ思^ノ動^ク 乙夜^{漢言}裁^ス

仙洞（後桜町上皇）御製

殿づくり みがきたてたるうれしさの ころをみする^{のぶる}
やまとことの葉

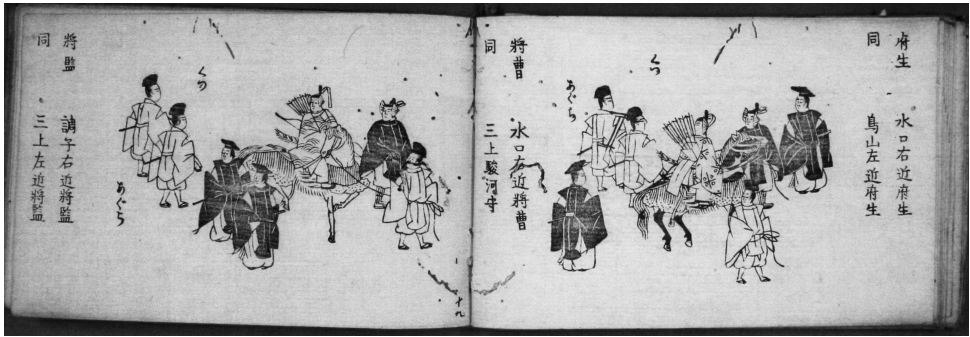
しかも、この漢詩には、幕府の儒官柴野邦彦（栗山）が注解を加えており、それも含めて幕末に書写された「諸家文集」が東京都立中央図書館の特別文庫（中山久四郎氏旧蔵本）の中にある。当時の良好な朝幕関係を示す資料と思われるが、主題から外れるので翻刻は割愛する。

（平成二十九年七月二十七日稿）



18-オ

17-ウ



19-オ

18-ウ



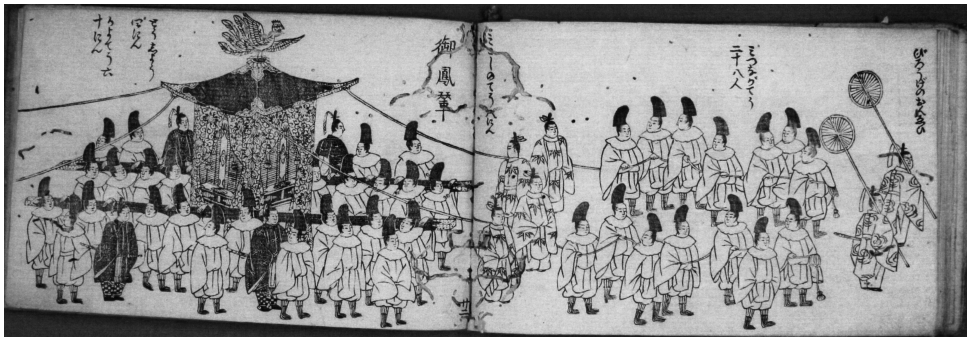
20-オ

19-ウ



21-オ

20-ウ



22-オ

21-ウ



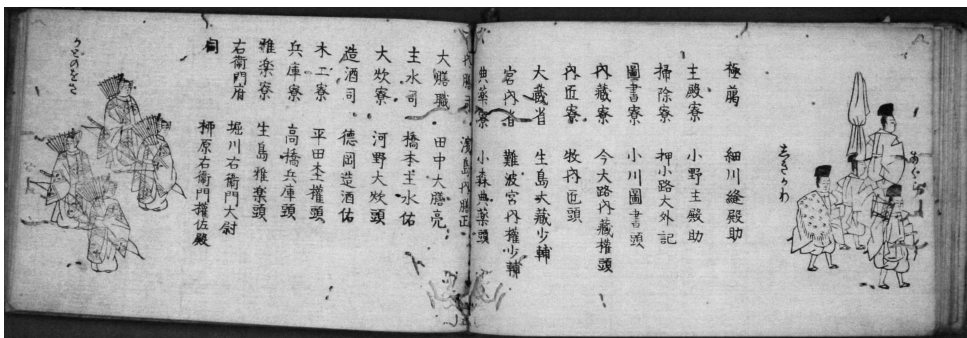
23-オ

22-ウ



24-オ

23-ウ



25-オ

24-ウ



26-オ

25-ウ



27-オ

26-ウ



28-オ

27-ウ



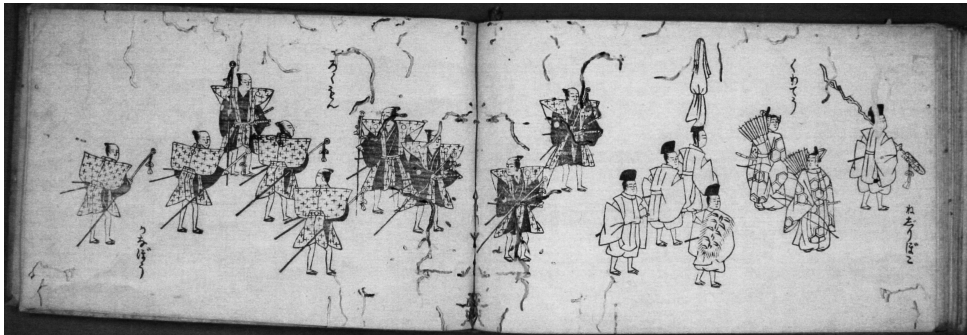
29-オ

28-ウ



30-オ

29-ウ



31-オ

30-ウ



32-オ

31-ウ



33-オ

32-ウ